

## 平成25年度 近事研学校事務セミナー報告

「モンスターペアレント論を超えて～保護者と向き合う気持ちと教職員の共同性～」

大阪大学大学院人間科学研究科教授（教育学博士）小野田 正利 様

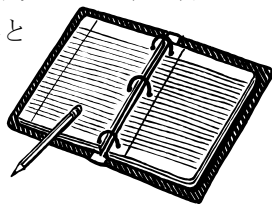


平成26年2月28日、京都タワーホテルにおいて近事研学校事務セミナーを開催しました。

講師には学校に寄せられる対応困難な苦情やクレームの対応に関する研究に取り組んでおられ、内外教育に連載もされている、教育学博士の小和田正利様をお招きしご講演いただきました。

### 《正確な記録の大切さ》

いじめ防止対策推進法が施行され、以前より一層記録が重要となっているということで、記録の仕方について教えていただきました。教師は自分の思いや願望を記録に書いてしまいがちで、抽象的あるいは感覚的な表現が多くなってしまうことが多い。しかし記録とは事実を客観的に正確に書いておくことが必要なので、事実と自分の考えは分けて記録しなければならない。例えばノートの左ページに時間経過や同席者など**事実のみ**を、右ページに**自分の考えや感想**を書いておくと、記録の提出が必要となった時、左ページのみ提出すればよい。また学校現場では何か重大事案が起こったら、まず話し合いを持つとするが、そうではなくまず一人ひとりが自分の把握している事実を記録することが大切。すぐに集まって経過報告などをすると、どうしても声の大きな人の発言に影響されてしまう傾向がある。そうならないよう個人の記憶と情報を固定してから、集約と共有化をすればよい。このような記録のとり方と事実の確認の仕方が、子どもを守り、保護者の信頼を得、教職員自身も尊重されることになるとお話いただきました。



### 《100%ではなく70%の力で》

「モンスターペアレント」という言葉がはやったが、それは保護者を「敵」とみなし、不必要な対立を自ら招いてしまう危ないもの。最初は保護者や地域住民の厳しい言葉や行動に目がいてしまうこともあるが、苦情、クレームに100%の力で対応するのではなく、ちょっと抑え気味の70%の力で聴くことで、その問題の出口が見つかることも多い。また教師は理屈を説いて判らせようとするが、親には思いがあるので「ずれ」が生まれやすいと自覚しておく。「振り上げた拳の源にあるものを見定める」ことができ、適切な対応ができるのではないかと。保護者と適切な距離や関係性を維持しながら、子どもの成長を共に喜べる関係を築けるよう、豊富なエピソードとともに、具体的な対応策も教えていただき、今後の保護者対応に役立つお話を聞かせていただきました。

### 《まず話そう語ろう～共同性の発揮》

保護者対応に悩んでしまうことは、誰にでもあること。そんな時は一人で抱え込まないようにし、周りもそういう人がいることに気づいたら声をかけて欲しい。「共同性」や「同僚性」はいくら研修を積んでも生まれにくい。一見ムダと思われる時間と空間がそれを創り出している。笑い声のあふれる学校にしていくことが、教職員のためであるし、子どもたちのためでもあると教えていただきました。「研修ではなく、なんぼグランド花月に来たと思って楽しんでください。」とおっしゃっていただいた通り、笑いの絶えないそして心に残る研修会となりました。〈文責 吉川 協子〉

